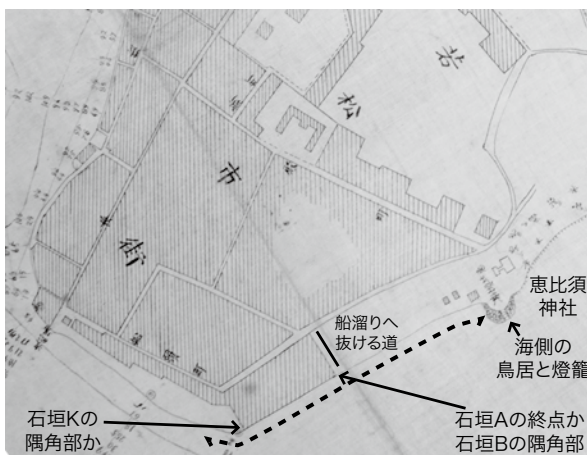
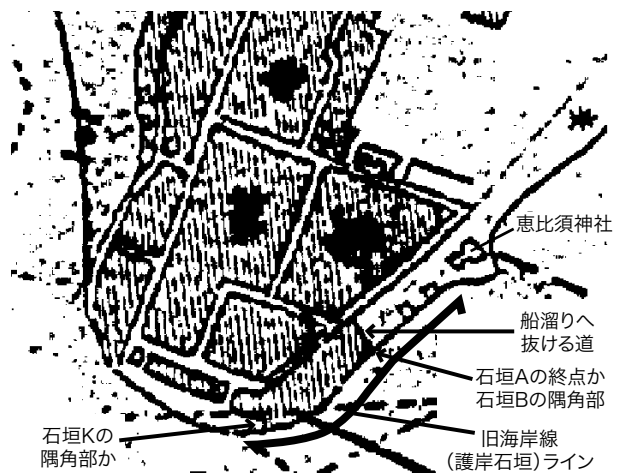


⑤「明治時代の若松市図」『若松市史』より 若松築港による埋立以前の状況を描いたもので、ここに描かれている黒色の護岸部分(白線部分)が本稿で検討した若築建設裏石垣にあたる可能性が高い。



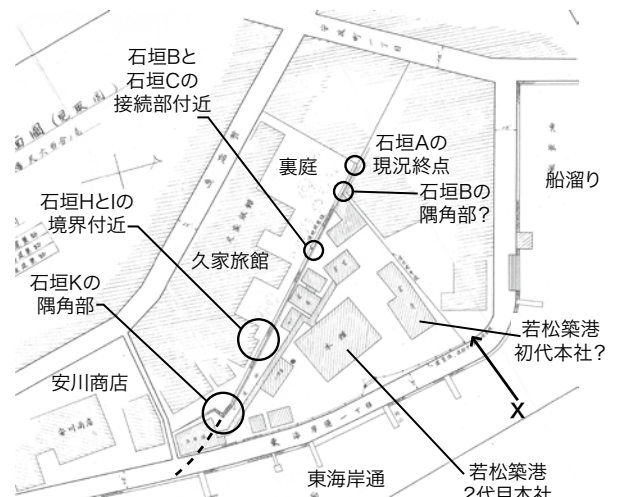
⑪若築建設所蔵 明治23年頃 若松港中洲之図(部分)
→上記の「明治時代の若松市図」に描かれた状態に近いと推定される築港前の若松港を描いたもの
→破線のラインが旧海岸線(護岸石垣)に相当する



①「若松港湾実測図」『明治23年4月8日 福岡県下若松港内開築の件』
→左図の「若松港中洲之図」と同時期に海軍省に提出された築港案
→「若松港中洲之図」に描かれている内容と、精度の除いて同様のもの

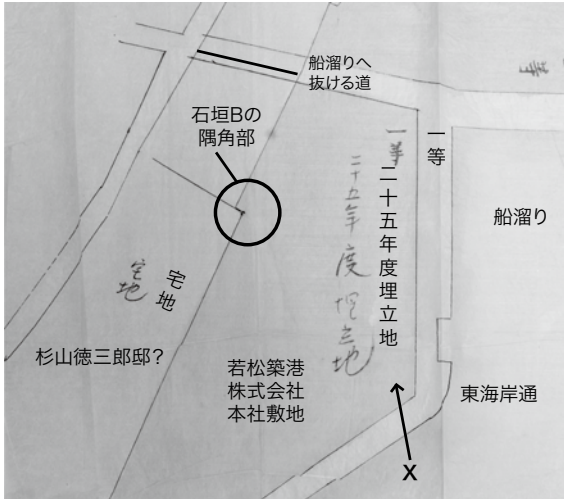


⑫若築建設所蔵 明治23~25年頃 旧本社写真(部分)
→石垣のカーブ等の位置関係から見て、明治25年埋立範囲図と昭和4年「一般平面図(見取図)」の「X地点」付近から撮影か。
→第1期埋立工事の記念か。
→年代不詳であるが、若築建設史料群の中に、この写真に写る旧本社社屋と道路を描いた簡易図面が確認され、そこには本社と記されていることから、写真右側に写る長屋建物が旧本社社屋であろう。
→明治から昭和初期にかけて、社用地が分割されたことを示している。

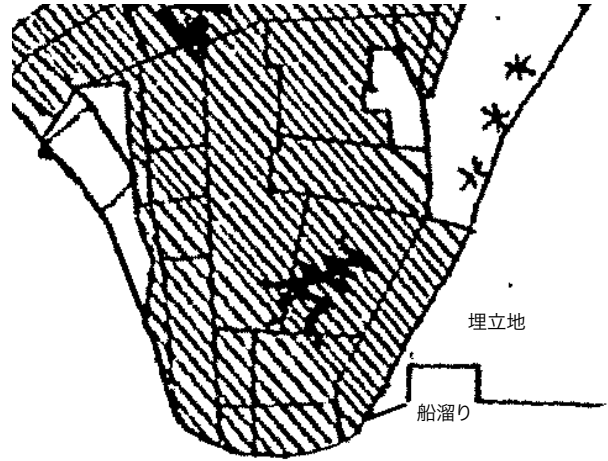


⑭若築建設所蔵 昭和4年「一般平面図(見取図)」
→石垣の内側に久家旅館と記されている。
→若松築港の左手には安川商店が所在する。
→破線は石垣の復元ライン

第15図 絵図・地図・古写真から見た若築建設裏石垣1



⑬若築建設所蔵 明治25年 埋立範囲図(部分)
 →石垣Bの隅角部と想定される部分に角の表現が描かれている。
 →連続する石垣Aと考えられる部分とは段差が表現されている。
 石垣Bは縦に伸びる縦方向の線が描かれていることから石垣が
 奥側に延びていることが予想される。



⑭明治31年9月6日 「洞海湾製鐵所埋立地之図」
 『海面埋立の件筑前国洞海湾内埋立の上製鐵所敷地に充用の件』



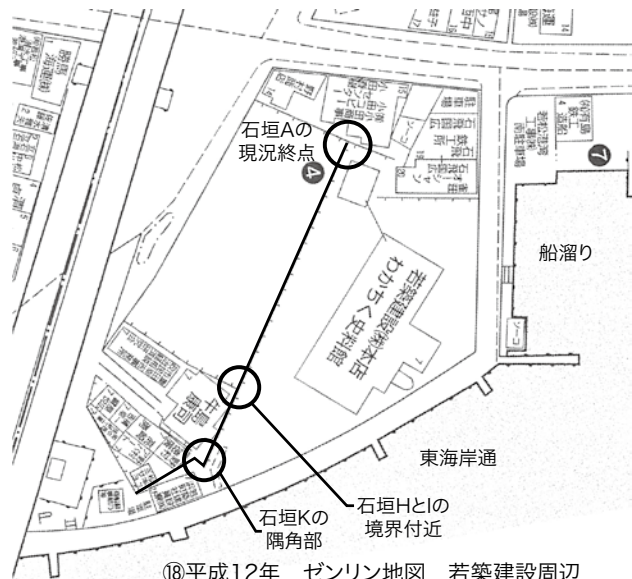
⑮昭和12年 『若松市土地宝典』の若築建設周辺(陸地側)



⑯昭和12年 『若松市土地宝典』の若築建設周辺(埋立地側)

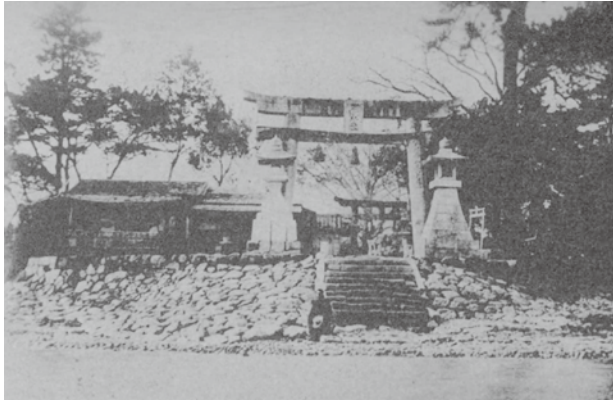


⑰昭和8年 『九州 若松案内』 若築建設周辺(抜粋)
 →石垣部分に相当すると考えられる部分(埋立以前の
 旧海岸線ライン)が市町村界の地図記号(一点破線)
 として描かれる。



⑱平成12年 ゼンリン地図 若築建設周辺

第16図 絵図・地図・古写真から見た若築建設裏石垣2



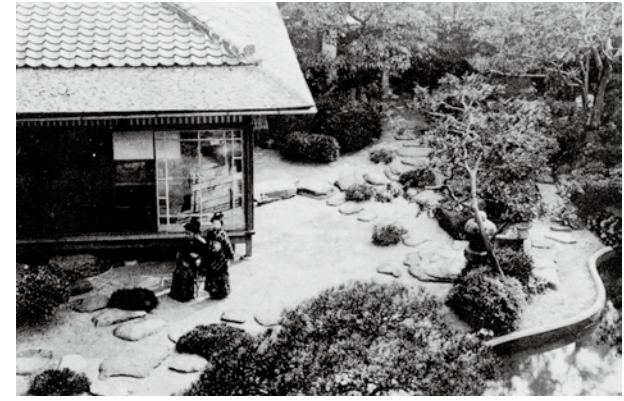
①若松築港による埋立以前の恵比須神社 海側の鳥居と燈籠
→燈籠は現在も写真に近似した位置に存在する。



②戦前の絵葉書か 若松市 旅館 ひさや 絵葉書資料館提供
→ひさや旅館の正面側から撮影されたもの。
→右側に洋風の建物、左側に土蔵が見える。



②戦前の絵葉書か 若松市 旅館 ひさや 絵葉書資料館提供
→ひさや旅館の庭園から裏手建物を撮影したもの。
→表側と異なり、裏側は和風の建物。



②久家旅館の庭園 宇佐美 明・今村元市1980より
→(引用) 明治中期から昭和19年まで、高級旅館として経営されて
いた。港町の旅館としては風格があり、中央にも聞こえていた。



若築建設裏石垣の現況1 奥が石垣A 手前が石垣B



若築建設裏石垣の現況2 石垣B 隅角部



若築建設裏石垣の現況3 石垣F・Gの出入口遺構



若築建設裏石垣の現況4 石垣K隅角部

第 17 図 杉山徳三郎邸関連の古写真（絵葉書）と現況写真

第8表 絵図・地図・古写真一覧表（本稿未掲載の史料を含む）

番号	年代	名称	収録文献	作成主体	出典
1	1890 (明治23) 年	若松港湾実測図	明治23年4月8日 福岡県下若松港内開築の件	海軍省	アジ歴：C10124829400
2	1898 (明治31) 年	洞海湾製鐵所埋立地之図	明治31年9月6日 海面埋立の件筑前洞海湾内埋立の上製鉄所敷地に充用 の件	海軍省	アジ歴：C10126567200
3	1899 (明治32) 年	若松築港拡張計画之図	明治32年3月8日 若松築港計画拡張並港線率改定の義に付伺の件	海軍省	アジ歴：C10126840300
4	1902 (明治35) 年	名称なし	明治35年11月21日 水面埋立の件に付稟伺	海軍省	アジ歴：C10127799100 明治33年測図
5	1916 (大正5) 年	官報第803號附図	若松港内工作物施設ノ件	海軍省	アジ歴：C08020871600
6	1916 (大正5) 年	官報第1813號附図 若松港 No.171 図	若松港内浚渫区域拡張ノ件	海軍省	アジ歴：C08020870500
7	1920 (大正9) 年	洞海湾平面図	下関要塞地帯内海面埋立の件	陸軍省	アジ歴：C03011295200 明治37年測図
8	1922 (大正11) 年	若松港及戸畑町地先	築港（又ハ埋立）計画平面図及其他陳述書等二関スル件	外務省	アジ歴：B10073416100
9	1922 (大正11) 年	海図第171號写	若松港内水底「ケーブル」線布設ノ件	海軍省	アジ歴：C08050620300
10	1927 (昭和2) 年	若松港内繁船浮標位置圖	港湾工事施行ノ件	海軍省	アジ歴：C04015936800
11	1890 (明治23) 年前後	若松港中洲之図	若松史料館展示資料	若松築港	若松建設所蔵
12	1892 (明治25) 年頃	若松建設・旧本社社屋	若松史料館展示資料	若松築港	若松建設所蔵
13	1892 (明治25) 年	埋立範圍圖	-	若松築港	若松建設所蔵
14	1929 (昭和4) 年	一般平面圖（見取圖）	-	若松築港	若松建設所蔵
15	1890 (明治23) 年前後	明治時代の若松市図	『若松市史』	若松市	-
16	1933 (昭和8) 年	九州 若松案内	同前	若松商工会議所	北九州市中央図書館
17	1937 (昭和12) 年	若松市土地宝典	同前	若松市	個人
18	2000 (平成12) 年		『ゼンリン住宅地図2000 北九州市 若松区』		株式会社ゼンリン
19	1890 (明治23) 年前後?	古写真 恵比須神社の鳥居と燈籠	『若松市史』	若松市	-
20	戦前?	古写真 若松市 旅館 ひさや	絵葉書	不明	絵葉書資料館
21	戦前?	古写真 若松市 旅館 ひさや	絵葉書	不明	絵葉書資料館
22	戦前?	古写真 久家旅館の庭園	『114 ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 若松・戸畑』	国書刊行会	宇佐美 明・今村元市 1980

が必要となってくるだろう。いずれにしても、築石のみの観察の限界性や発掘調査情報の欠落を痛感し、類例との比較検討が必要である。

6. おわりに

以上、本稿での検討によって推定された結果とそこから想定される仮説を以下にまとめる。

- ①若築建設裏石垣は、目地や改修等の痕跡から石垣 A～K までに分類できる。
- ②上記の石垣の中で、石垣 A と B のみが谷積みで、石垣 C～K までが布積みであることから、少なくとも石垣 C→B→A の構築順序が確定する。ただし石垣 C と B は元々一連の石垣を積み直した可能性が考えられる。
- ③石垣に残る矢穴痕の分類と検討から、若築建設裏石垣には 4 種類の矢穴痕が確認され、少なくとも 19 世紀初頭から出現する矢穴痕が 19 世紀中頃以降に出現する矢穴痕と共伴する可能性がある。
- ④最も新しい矢穴痕タイプ (E タイプ) の出現年代等を考慮すると、石垣の構築年代は 19 世紀中頃以降で下限は不明と言わざるを得ないが、20 世紀前半頃までを考慮しても良いだろう。
- ⑤石面のみであるが、築石規格の検討からはおおそ 3 種類の規格が使用されたと推測され、控え部分の確認ができると細分が行える可能性が高い。
- ⑥若築建設史料群の古写真から、大正 15 年頃の間知石製作状況の実態が確認できた。
- ⑦築石に残る矢穴痕の場所と積み方の関係性を検討することで、細かな構築方向や順序を読み取ることができ、いわゆる「目地」との関連を示す根拠となる可能性を指摘した。
- ⑧⑦と合わせて、築石の中で、最初に設置される「始点石」と最後に設置される「終点石」で構成される石垣構築のユニットを提示し、築石の観察を行う際の視点を模索した。そしてこれは、若築建設史料群の古写真によって検証された。
- ⑨絵図・地図・古写真の検討から、徳三郎邸を含む旧若松港護岸ライン（一部）を推定した。
- ⑩積み直しや改修等を含みつつも、徳三郎邸の石垣は石垣 B～石垣 K に相当する可能性を指摘した。

以上が、本稿において検討・指摘した概要である。特に近代に構築された石垣に関する検討事例の少ない現状では、ケーススタディとして様々な視点から検討を試みた。また、「そもそも石垣の改修・積み直しを指摘する具体的な根拠とは何か」など、今後はさらに類似した石垣の検討事例を増やすことで、今回提示した仮説の検証を行い、石垣工事の実態や工程（岩下 2012・久保田 2016 等）について理解を深めていきたい。

若築建設には創業時からの史料が大量に保存されており、その全てが若松の歴史として、北九州市の歴史として、日本の歴史として非常に貴重なものである。今回の石垣調査に際して、多くの史料を閲覧させて頂き、その重要性を痛感した。今後も史料の調査を含め、埋立後の若松港護岸石垣との比較検討を行いたいと考えている。

若松港の旧護岸ラインと考えられる若築建設裏石垣と若松港護岸石垣は、若松港が近代化していく姿を空間的に残している点で非常に稀有な事例と言える。これらの調査・研究を深め、近代若松港の歴史の変遷やその歴史的価値を示していくための調査や、恒久的な保存に向けての取り組みが必要であろう。本稿において検討した旧護岸石垣として、杉山徳三郎邸石垣としての若築建設裏石垣の調査・検討は、その第1ステップである。

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、西海考古同人会事務局 古門雅高氏には掲載の機会を与えて頂きました。現地調査や史料の閲覧に際しては若築建設株式会社、わかちく史料館 江副享子氏に多大な便宜を計って頂きました。石垣の調査に際しては梅崎恵司氏と共同で行い、調査中の議論や会話で多くのことを学びました。資料や若松の歴史については、旧古河鉱業若松ビル館長の若宮幸一氏にご教示頂きました。佐伯孝央氏との議論においても多くのご教示を得ました。皆様に厚く御礼申し上げます。

【註】

註1 この石垣に関する調査は、筆者と梅崎恵司氏がわかちく史料館を見学している際に、史料館の担当職員である江副享子氏に偶然声をかけて頂いたことに始まる。数奇なものではあるが、このようなきっかけが無ければ筆者も梅崎氏も、この石垣の存在や若松港の歴史的重要性について深く認識することができなかった。この場を借りて、声をかけて頂いた江副氏に感謝申し上げます。

註2 これは「官令彙纂 第1號 明治19年9月分」『岐阜日日新聞社』の通信省告示第82号に「若松丸」と船主氏名「杉山徳三郎」の記載が確認できることから事実であると考えられる。

註3 登記簿の確認については、旧古河鉱業若松ビル館長の若宮幸一氏にご協力いただいた。

註4 撮影はCanon ミラーレス一眼レフ M6を使用した。三次元化には Agisoft 社の Metashape standard (全て高精度で解析) を、オルソ画像の生成は Cloudcompare を使用した。

註5 梅崎恵司氏によって、北九州市内において間知石まで作成していたと推定される石切場が確認されており、筆者も現地を確認している。今後、詳細な踏査・検討を行う予定である。

註6 この場合の加工面については、切込接ぎの石垣に限定して考えている。近世的な間詰め石を多用する石垣に当てはめるには、さらなる検討が必要と思われる。なお、築石上下の接点については、下高大輔氏による一連の築石研究で指摘されている(下高2020・2022・2023など)。

註7 北垣1987によると、「築石は、石列に沿って順序だてて築く必要は全くない。石材の大小、控の形状等を勘案しながら、築石を選んで、適材適所に配石していく。最初は虫食い状に配された状況も、次第に埋められていく。大小の野面石を使用するのであるから、二段積みとなる部分も当然起こりうる。(北垣1987 p.306)」とされ、また、北垣1999では、「石面の下端長辺を水平状に二点支持を心がけ、数石を単位として短い横目地をつくる。これは意識的な石材選択が実施されたことをうかがわせる。かつて栗田翁は、主石(中心となる石)をまず適当に配石し、そのあと間石を入れ調整されていた(北垣1999 p.13)。(中略)布(目)積み崩しは、自然石・割石の大小、縦横のある不定形の石材数石でもって、一定の「まとまり」をつくる。特徴のある主石(中心となる石)をいくつか定め、各々石材の下端の長辺をできるだけ水平にとるように据石をする。その結果、短い横目地が通る。こうした小さな「まとまり」を築石部とする石積みの(を：筆者追加)上下、左右に配石することで、結果的には小判型をした金網の目を横に引いた形状、つまり筋違いのある短い横目地が通る(北垣1999 p.17)」と指摘している。

註8 これは北垣1987の図32に示されている「石積みの方向」や、「基点を中心に左右水平を保って石垣を伸ばすのである(北垣1987 p.309)」という指摘に近いと考えている。

註9 角石は隅角に独立させて算木積みに組むので、石垣稜線は不安定となりやすい。この角石の重量による左右か

らの内圧を、その背後で受けるのが角脇石である（北垣1987 p.304）。

註10 明治時代後半から大正時代の地図類が未確認であるため、この間の状況を現状では追うことができない。ただし、昭和4年の第15図④で描かれている本社は明治42年竣工の2代日本社であることから、状況的には明治後期の状況が全てではないものの残っていると考えられる。

【引用・参考文献】

- 合田茂伸 2012 「間知石積みに関する覚え」『菟原 2 森岡秀人さん還暦記念論文集』 菟原刊行会 pp.731-738
- 安部和城 2022 「旧豊前国小倉藩北部の石造物と石工に関する基礎的研究 - 北九州市域における近世・近現代の八幡神社を中心とした石造物の分布調査と石燈籠について -」『研究紀要 第36号』 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 pp.27-44
- 安部和城 2023 「旧豊前国小倉藩北部の石造物と石工に関する基礎的研究2 - 集成編1 北九州市門司区の神社を中心に -」『研究紀要 第37号』 北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 pp.27-42
- 市川浩文 2010 「近世城郭石垣における石割り技術 - 肥前名護屋城跡の矢穴調査 -」『先史学・考古学論究V』 pp.787-809
- 稲吉 晃 2012 「地方政治と実業家 - 明治・大正期の洞海湾開発をめぐる -」『法政理論 45 卷1号』 新潟大学法学会 pp.52-74
- 岩下友美 2012 「山梨県と周辺地域における近現代の石積技術 - 『石積の技法とその解説』から辿る石積技能者大久保氏の系譜 -」『研究紀要 28』 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター pp.35-45
- 宇佐美 明・今村元市 1980 『114 ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 若松・戸畑』 国書刊行会
- 遠藤徹也 2012 「筑豊炭田の隆盛を見届けた「若松港石積護岸」『Civil engineering consultant : 建設コンサルタント協会誌 Vol.254』 建設コンサルタント協会 pp.28-31
- 荻野喜弘 1984 「明治中期における筑豊石炭鉱業組合の組織と活動 - 明治18年の創立から明治33年ごろまで -」『エネルギー史研究：石炭を中心として NO.13』 九州大学石炭研究センター pp.1-32
- 北垣聰一郎 1987 『ものと人間の文化史 58 石垣普請』 法政大学出版局
- 北垣聰一郎 1999 「「伝統的石積み技法の成立とその変遷」- 穴太積みの意味するもの -」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷 第22冊』 奈良県立橿原考古学研究所 pp.1-28
- 北垣聰一郎 2007 「修復工事を通して見た石割りと石作り」『日引き 第10号』 石造物研究会 pp.2-19
- 北九州市産業史・公害対策史・土木史編集委員会 土木史学会 1998 『北九州市土木史』 北九州市
- 北九州市史編さん委員会 編 1991 『北九州市史 産業経済Ⅰ』 北九州市
- 北九州市小学校社会科研究協議会・若松区小学校社会科同好会 2000 『子どものための若松郷土史 港・まつり・五平太ものがたり』 あらき書店
- 久保田健太郎 2016 「甲府城の野面積み石垣における石積み工程」『研究紀要 32』 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター pp.57-64
- 国土交通省河川局河川環境課 2006 『河川の景観形成に資する石積み構造物の整備に関する資料』
- 国土交通省河川局河川環境課 2007 『河川の景観形成に資する石積み構造物の整備に関する資料（その2）』
- 清水憲一 1991 「北九州工業地帯と工業用地・海面埋立 - 工業地帯形成と地域経済 -」『日本帝国主義の経済政策』 柏書房 pp.65-100
- 清水憲一 1996 「『安川敬一郎日記』と地域経済の興業化について - 若松築港会社の拡張工事を事例として -」『九州国際大学経営経済論集 第3巻第2号』 九州国際大学経済学会 pp.1-20
- 下高大輔 2020 「熊本城の石垣変遷」『特別史跡熊本城総括報告書 調査研究編 第2分冊』 熊本市熊本城調査研究センター pp.210-228
- 下高大輔 2022 「豊臣系城郭石垣の提唱 ～認知のための基礎的作業～」『西国城館論集Ⅳ』 中国・四国城館調査検討会 pp.251-260
- 下高大輔 2023 「織豊城郭石垣の編年的研究 - 城郭石垣研究の理論的整理 -」『織豊城郭 第20号』 織豊期城郭研究会 pp.203-220
- 高瀬哲郎 1996 「九州に於ける近世城郭の石垣について（その2）」『研究紀要 第2集』 佐賀県立名護屋城博物館 pp.1-41

- 高瀬哲郎 1998 「「石を積む」ということなど」『研究紀要 第4集』佐賀県立名護屋城博物館 pp.11-26
- 高田祐一 2019 「矢穴研究の方法と可能性 - 慶長・元和・寛永期における城郭石垣石材を中心に -」『中世石工の考古学』高志書院 pp.155-175
- 田中邦博・長弘雄次 1998 「創世期における若松港・洞海湾の開発に関する研究」『土木史研究 第18号』土木学会 pp.579-594
- 富田文悟・土居義岳 1999 「北九州市若松区における埋立地の形成過程 明治以降における海岸通りの形成とその景観的意味」『日本建築学会九州支部研究報告 第38号』日本建築学会 pp.465-468
- 永田榮市郎 編 2014 『若松雑記 若松市史などより』私家版
- 西嶋崇氏・樋口明彦・仲間浩一 2005 「洞海湾における護岸構造物の現況基礎調査に基づく歴史性の把握」『土木計画学研究・講演集 第32巻』土木学会
- 乗岡 実 2023a 「織豊期城郭に用いられた矢穴技法」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要 第15号』岡山市教育委員会文化財課 pp.130-159
- 乗岡 実 2023b 「松江城の石材調達 - 採石地と矢穴技法を中心に -」『論集 松江 I』松江市 pp.207-230
- 畑岡 寛・田中邦博・市川紀一・亀田伸裕 2002 「筑豊炭の運炭機構の形成に関する史的研究」『土木史研究 第22号』 pp.149-159
- 秀村選三 1976 「明治中期若松築港に関する一資料 - 高橋 達「若松築港大計画ノ必要ヲ論ズ」紹介 -」『エネルギー史研究：石炭を中心として N0.6』九州大学石炭研究センター pp.28-34
- 前田裕子 2014 「若松築港 海陸連携地域開発の要」『ビジネス・インフラの明治 白石直治と土木の世界』名古屋大学出版会 pp.165-214
- 森岡秀人 2017 「矢穴技法」『織豊系城郭とは何か - その成果と課題 -』サンライズ出版 pp.162-167
- 森岡秀人 2021 「矢穴型式編年の考古学上の意義と年代再考序説」『滋賀県立大学考古学研究室論集 1』滋賀県立大学考古学研究室 pp.281-292
- 森岡秀人・藤川祐作 2008 「矢穴の型式学」『古代学研究 第180号』古代学研究会 pp.405-418
- 山本 潔 編 1902 『土木工事仕様設計実測』共益商社蔵版 pp.13-16
- 若築建設株式会社 90年史編纂委員会 編 1970 『若築建設八十年史』若築建設株式会社
- 若築建設株式会社 90年史編纂委員会 編 1980 『若築建設九十年史』若築建設株式会社
- 若築建設株式会社 1990 『若築建設百年史』若築建設株式会社
- 若築建設株式会社 2000 『若築建設百十年史』若築建設株式会社
- 若松市役所 編 1917 『若松市誌』若松市役所
- 若松市史第2集編集委員会 1959 『若松市史 第2集』福岡県若松市役所
- 若松郷土研究会 1969 『若松百年年表 郷土若松特集号』北九州市立若松図書館
- 若松恵比須神社 1984 『若松恵比須神社一千年史』若松恵比須神社々務所